
黄色いチューリップ

はぴ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄色いチュー・リップ

【Zコード】

N64380

【作者名】

はぴ子

【あらすじ】

黄色いチュー・リップを大好きなおばあちゃんが植える。
そして早く咲くようにと願う。

黄色いチュー・リップが咲いたら早く枯れるようにと願う。
自分のおばあちゃんが魔法使い。。。あなたは信じますか？

(前書き)

初めての投稿です。
一生懸命書きました。
それ程長くないので是非読んでください
感想くれると嬉しいです。

わたしはおばあちゃんが大好きです。私の名前もおばあちゃんが考
えてくれました。4月の桜が咲いている頃に生まれたので「さくら」
と名づけてくれました。私はおばあちゃんと一緒に住んでいました。
毎日がとても楽しい日々でした。おばあちゃんはいつも美味しい肉
じゃがを作ってくれます。冬になるとマフラーを編んでくれます。
私が泣いていると「なくんじやないよ」と私の涙を拭いてくれます。
大好きなおばあちゃんが長生きできるように私はおばあちゃんにし
てあげられることは全部してあげたいです。

教室中に拍手が鳴り響く。

今日は学校の作文発表会。私は小学4年生のさくら。私は田舎の
おばあちゃんのところに住んでいたけれどお父さんの転勤で都会に
引っ越ししてきた。私は小さい頃からおばあちゃんの子だった。おば
あちゃんが近所の農家に野菜をもらいに行くと言つたらどんなに眠
くても疲れていても着いていった。私の住んでた家はおばあちゃん
の家から5分くらいの所にあった。学校が終わると自分の家ではな
くおばあちゃんの家に帰つていた。

お父さんの転勤の話を聞いたのはつい2週間前のこと。私はとて
も悲しくつらかった。また会えるとわかつてはいたけれど今まで一
緒にいた人と離れることはつらかった。

今日もあまり慣れない学校から家へと帰る。雨が私のことをぬらす。

「お母さん。私の作文どうだった?」

「とても良かつたわよ。私の大好きな人といつ題名でお母さんの前でおばあちゃんの事を読むとはね」

「じめんなさい」

私とお母さんは昔から仲が良くない。私がおばあちゃんの所ばかり行くもんとそれが気に入らなかつたのかもしれない。私は3人家族だが私の朝ごはんはいつもパンの耳。お母さんとお父さんはパンの白いフワフワしている部分を食べている。だから学校でパンが出る日は嬉しくなる。

今日も何事もなく学校が終わりいつもの帰り道を歩く。今日は太陽が眩しい。

家に着くとポストに一通の手紙が入つていた。前に図書カードが当たるキャンペーンとかなんとかでハガキを送つたつけ。とハッキリ言つてどうでもいい気持ちで差出人を見る。手書き。とにかくろ変な癖のある字。・・・おばあちゃんだ。嬉しくて嬉しくて封筒をビリビリに破いて中を見た。

さくらへ

そちらの生活はどうですか?おばあちゃんはさくらがいなくなつてから話す相手がいなくてとても寂しいです。来週は学校が3日間おやすみと聞きました。もう大きいのだから一人でも来れるでしょう。おいしい肉じゃがを作つて待つています。そうそう、チューリップの球根があるので一緒に植えましょう。

おばあちゃんより

2週間会つていないだけなのに「んなに懐かしい気分になるとは。なんだか不思議な気持ちだつた。

今週は休みが三日ある。この小学校は勉強に力を入れていて、テストが近くなると土曜日日曜日にプラスして月曜日も休みになる。今週はおばあちゃんに会いにいこう。手紙を読むと今すぐでも飛んでいきたくなるほどおばあちゃんに会いたくなつた。

家に入るとすぐおばあちゃんの家へ行く準備をした。お母さんは準備が全部済んでから伝えることにした。

おばあちゃんの住んでいるところまで行くのはそれ程遠くはない。私も電車くらい乗れるから一人でたつて行ける。おばあちゃんの住んでいる田舎は寒いから暖かい格好をしていかなきや。パジャマも冬用のでいいかな。おばあちゃんの為にお花を摘んでいこう。久しぶりにこんなにワクワクしている。こんなに楽しい気分は久しぶりだ。

「お母さん、私おばあちゃんの家に行つてくるから」「勝手にしなさい。テストで悪い点数取つたら承知しないからね」「はい」

相変わらずお母さんは怖い。性格が合つ気が一切しない。本当だつたらこのまま家出してしまいたい。

電車の切符を買う。

切符を改札口へ通す。

電車の窓側の席に座る。

隣の人�탏バ口臭い。

気がつくと見慣れた風景。

そして優しい立ち姿のおばあちゃん。

驚いた。おばあちゃんが立つていて。私は急いで電車を降り、おばあちゃんの元へと駆け寄つた。

「おばあちゃん！－どうしたの－」

「せーらが来てくれると思つて待つていたんだよ」

「す、」「ー、おばあちゃん、私の心が繋がっているみたい！」

私は少し感動して涙が出そうになつたけど恥ずかしいから上を向い

て涙を引つ込めた。

おばあちゃんの家に着くまでにたくさん話した。私のクラスの友達のこと。1月の前の作文発表会でおばあちゃんの事を読んだこと。楽しい時間はあつという間に過ぎておばあちゃんの家に着いた。おばあちゃんは休む間もなくエプロンをつけ料理の準備に取り掛かる。おばあちゃんは昔からとても働きものだ。少し休んでもいいのに、と黙つてしまふ。

おばあちゃんは冷蔵庫を開け材料を取り出す。

手を洗うのに蛇口をひねる。

野菜を切る音が台所中に響く。

私は居間のソファに座る。

飾られているおばあちゃんと私の写真を見る。私は思い出す。

私が幼く、犬のことをワンワンと言つてゐる頃。

「ねえおばあちゃんはわあ、魔法ちゅかいなの？」

おばあちゃんは、私がケガをすると「痛い痛いのとんでもない」と言って私のケガを治してくれた。不思議なくらいに痛みは消えた。それが不思議でそう言ったのだろう。

「おまえが魔法つかひおもんは、ほんとう」

私はキャッキャして、本当におばあちゃんは魔法使いだと思つた。そう思つと嬉しくて嬉しくて脣に血漫をして歩いたことも思い出す。でも今思つとおばあちゃんが子供の夢を壊さぬようついただけの事だなと感つ。

私はふざけておばあちゃんに尋ねる。

「ねえおばあちゃんはさあ、魔法使いなの？」

「おばあちゃんは魔法つかいよお

何年か前のときと同じことを言つていて。おばあちゃんは優しいな。

私のおふざけにもノッてくれる。

「そつか！ そうだよね！ 昔から言つてるもんね

私はおばあちゃんが大好きだ。地球が終わる最後の日会いに行く人といつたらおばあちゃんだろ。でもこめんね、おばあちゃん。あなたの言う魔法使いの話は信じる気持ちにはなれません。

気がつくと私は横になつていて私の体には毛布がかけられていた。

「起きたかい？」

いつもとは違う優しい声。そつかいはおばあちゃんの家だ。醤油の甘い臭いが私の食欲を誘う。

「うん。私おなか空いたな

「よし、寝るのにも体力を使うから沢山食べれるねえ。箸を持っておいで」

「寝る時に体力使うんだあ

だから朝起きたらお腹が空いているのか。夜寝ている時間が長いし。納得納得。そうしたら寝なければお腹は空かない・・・いやそれは違うな。

おばあちゃんは私の知らない事を知つていて。そして教えてくれる。

キレイに掃除されている食器棚にある箸を取る。

席に戻る。

おばあちゃんを見る。

ニツコリと微笑んでいる。

私は胸がポカポカしていく。

皿に盛られている肉じゃがに手を伸ばす。

芋がホクホクと熱い。

おばあちゃんの優しい味。

楽しい時間はあつといつ間。

いつも気づいたら朝。

こんな日々が続くのなら。

全部自分の思い通りにいくのなら。

どれだけの人が幸せになり

どれだけの人が不幸になるのだらう。

今日はとても天気が良い。最高気温らしい。

今日はおばあちゃんとチユーリップを植える。おばあちゃんは帽子を被り、軍手をはいて私に向かって早く来るよつて、と手招きをしている。

「おばあちゃんの庭つてお花が沢山あるね。なんか赤い花ばかりだね」

「おばあちゃんは赤が好きなのよ。でもこのチユーリップは黄色いのよ」

おばあちゃんは慣れた手つきで穴を掘る。私もおばあちゃんの手つきを見てそれを真似る。土は意外と固いものだ。掘るのにも結構な力がいる。

「球根を入れる時お願い事するのよ」

「なんでもいいの?」

「ええ、願いが叶うとこのチユーリップは枯れるんだって」

そんな不思議な花もあるんだ。私はもちろんおばあちゃんの長生きを願う。おばあちゃんが長生きしますよつて。球根を土に埋める。黄色いチユーリップが咲いているのを想像しながら。

三日間なんてあつという間。帰つたらテストに向けて勉強か。おばあちゃんの家に住みたいな。おばあちゃんと暮らしたいな。

「何をボーッとしているの？電車遅れるよ」

「あつうん大丈夫」

おばあちゃんは電車の駅まで送ってくれた。私はおばあちゃんが寂しそうな顔をしている様に思えた。

「またおいでよ」

そう優しく言つてくれた。

電車の切符を買つ。

窓側の席に座る。

隣の人の香水の臭いがきつい。

「ただいま」

「おかえり、どうだつた？ 楽しかつたか？」

お父さんだ。珍しい。こんな早く帰つているとは。

お父さんは会社の社長。朝早くに出て行き、夜遅くに帰るから滅多に会えない。毎日素晴らしい一生涯懸命に働いている。さすがおばあちゃんの息子だ。とこいつも感心する。

「とつても楽しかつたよ。おばあちゃんの肉じゃがは何回食べても飽きないね。お父さんはこんなに美味しい料理を毎日食べたのよね。いいなあ」

「ベタ褒めだなあ」

お父さんは少し照れた様な顔で笑つている。お父さんもおばあちゃんが大好きなんだ。

「ねえ、私さ、おばあちゃんに魔法使いなの、つて尋ねるといつも「そうよ」つて答えるんだよね」

「ああお袋は昔からそうだよ。意外とノリが良いんだよな。もしかしたら本当にそうなのかもよ？」

「お父さんまでえ」

こんな風に仲良く話すのは何日ぶりだろう。

私は夢を見た。おばあちゃんが病気になってしまった夢。正夢にならない事だけを願う。

電話が鳴っている。誰だ？。ベルが一回、一回やして三回目が鳴る。誰かとつてよ。あ。今この家には私一人か。いけない、いけない。早く出なきや。

「もしもし」

電話の向こうの声はお父さんだ。とても焦っている。まさか・・・
「おばあちゃんが倒れた」

頭の中は真っ白だ。

昨日は元気に笑っていたおばあちゃんが倒れた
倒れたってどういう」と
倒れただけだよね

「今から向かえに行くから準備しておけ」

電話は切れた。

病院の人は一人でも多くの人を助けようと朝から晩まで動きっぱなし。病院の人はすごいと思う。命という大きなものの責任を背負い、その責任と戦っている。

おばあちゃんは階段で足を滑らせ落ちてしまつて、骨折した。自分で救急車を呼ぼうと動いたがうまく動けず倒れて頭を打つたそうだ。

お父さんと先生が話している。まったく耳に入つてこない。聞いてたとしても私の頭じゃわからないような難しい事だらけだろつ。

先生との話が終わつたようだ。お父さんが難しい顔をしながらこつちへ来る。

「おばあちゃんすぐ治るんでしょう？」

「・・・骨折の方はすぐ治るって」

「方は、つて何？頭だつてぶつかつただけでしょ？また前みたくお話沢山できるんでしょ？」

お父さんはそれから一言も話さなかつた。小学生の私でもこの状況はなんとなく読み取れる。

けど私は信じない。私は頑固な性格だ。自分の意見は絶対曲げない。いくら偉い人が何を言おうと私は自分の考えしか信じない。

おばあちゃんは入院することになった。病院の先生もおばあちゃんの病気を治すために全力を尽くしてくれる。私もできるだけなんだつてする。

私は学校が終わるとまずおばあちゃんの家へ行つて私達の植えたチューリップに水をあげる。

早く咲くよう」と。あの願い事が叶うよう」と。

そして病院へと向かう。

患者の命を預かる責任と戦つている人達のいる病院へと。

おばあちゃんは二日間寝ているだけだ。きっと疲れていたんだろう。またすぐに田を覚まし私にニッコリと微笑んでくれる。私は毎日おばあちゃんの手を握り願つてゐる。

おばあちゃんの手が少し動いた気がする。そして田がゆっくつと開く。

「さくらっ？」

私はニッコリ笑つてうなづいた。

今日も学校が終わりおばあちゃんの家へと向かう。そして私達の植えたチューリップに水をあげる。

そして田を覚ましてくれたおばあちゃんのいる病院へと向かう。

おばあちゃんは頭を強く打ったせいであまり上手く喋れない。
だから私がメモ帳と鉛筆を持っていてお話をしている。
でも病院の人人が喋れるようにリハビリをしてくれているから時々
言葉を話す。

早く前のように話せるようになればいいな。

私の病院通いの生活が三ヶ月間続いた。

おばあちゃんは昔のように言葉を話せるまで回復した。

「あへら、『めんね。おばあちゃん病気しちゃって』
「大丈夫だよ。すぐに治るから。そしたらまた肉じゃが作つてね」
おばあちゃんの優しい笑顔が私を元気にしてくれる。

今日も私はチューリップに水をやる。

黄色い薔薇が顔を出した。

この前一緒に植えたチューリップ。

できれば一人で水をやりたかったな。

病院へと向かう。

「おばあちゃんはさあ、魔法使いなんでしょう?じゃあおばあちゃん
の病気治せないの?」

私はなんでこんな事を言ったのだろう、と後悔した。

「おばあちゃんはねえ魔法使いだけど自分の体を治す」とはできな
いんだよ・・・でも長生きできるよう生きとけと凄い魔法を使つよ
おばあちゃんは毎日病気と闘つている。生きたいという強い気持ち
と共に闘つている。
そんな強くて前向きなおばあちゃんが大好き。

今日はお父さんも病院に来ている。また先生と話があるみたいだ。
そしてお父さんが前と同じ様な顔をしてじっと向かって来る。
そして何かを話そうとしている。

私に難しい話しても無駄だからね

「あのな、おばあちゃんは足は完全に治った。今は喋れる様にもなつた。ここまで回復は普通の人ではあり得ない程まで回復したらしい」

「やっぱりね！ だつておばあちゃんだもん！」

「でもな、頭を打つてしまつたばかりに病気が悪化するかもしれない。そして頭が麻痺してしまつてついには体が動かなくなることもあり得るんだ」

「まだ起こつてもいい事なんだから心配する必要なんてないですよ。私はそんなの信じないから。今日だつておばあちゃんとお話し

たし

「ああ・・・。やうだな」

私に話してくれたのは先生から聞いた話じゃないんでしょう？
本当はもつと複雑で危ない状況なんでしょう？

でもお父さんの考えは正解だね。

私にいくら本当の事を長々と説明しても私は少しも信じなかつたから。

そうしたらお父さんの話損。

時間の無駄でしかなかつたもん。

今日もいつもと変わりない。

私の歩く道も私の考えることも。

今日の空は雲ひとつない。

おばあちゃんの家の庭には黄色い花が咲いていた。

嬉しくて嬉しくて涙がこみ上げる。

一人で願いをこめて植えた花。

花が咲いた。

真っ赤な花たちの中に一本の黄色い花。

私は早く枯れることを願う。

誰もが不思議がることだろう。

花が枯れなど気持ち悪い考えだろう。

でも私は自分の考えを貫き通す。

これから私の願いに

早く枯れますように

と、追加される。

私は病院へと向かう。

いつもと変わりない私が

いつもと違う嬉しいコースを持つて。

「おばあちゃん！」

思いつきり扉を開ける。返事はない。
寝てたのかな。こんな大きい声出したら起しちゃう。

おばあちゃんの側へと寄る。

とても気持ちよさそうに眠っている。

なんだろう。紙に何か書かれている。

「じめんね」

なんでだろう。
どうしてだろう。
信じていなよ。
何も悲しくなんかないよ。

だつておばあちゃんは絶対に死ないもん。
なんでだろ？。

涙が溢れだしていくよ。

おばあちゃん。

早く田を開けて「なくんじゅなこよ」って涙を拭いてよ。

私は夢を見た。

黄色い一本のチューリップが枯れてい
きつと願いが叶うんだ。

うだよな。おばあちゃんが死ぬはずないもんね。

田を開けよ！とする。

夢から覚めよ！する。

私の泣いている声が聞こえる。

私だけじゃない。皆の泣き声や鼻をすする音が聞こえる。
でもどうして私はないているの。

私は今悲しくもないし泣いていないよ。

どうして歎泣しているの。

おばあちゃんは死んでしまったの？

お坊さんのが声がする。

桜田ちえさんの葬式・・・

おばあちゃんの棺前だ。

私は田を開けよ！とする。

しかし開ける事が出来ない。

どうして？

早くおばあちゃんを起しきなきや。
だから早く夢から醒めなきや。

だから早く夢から醒めなきや。

私はふと思いで出す。

「でも長生きをするためにわざと凄い魔法を使つよ

」

今なら信じられます。

あなたが魔法使いだといつゝと。

そして今ならわかります。

「「めんね」の本当の意味を。

おばあちゃんは本当に心の底から長生きしたかったんだね。

私はおばあちゃんが長生きするためにしてあげられることをした

んだね。

きつとこれでよかつたんだよね。

皆はおばあちゃんが死んでしまつたと思つでしょ。

そしてそれを信じない人なんていないでしょ。

私ではない私を私だと思うでしょ。

おばあちゃんは今も生きている。

私の丈夫な体と一緒に。

やつぱり私の考えは当たつていたんだ。

おばあちゃんは絶対に死はない

「ねえ、おばあちゃんはさあ魔法使いなの?..」

「おばあちゃんは魔法つかこよお

赤い花たちの中に一本の黄色い花が咲いている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6438o/>

黄色いチューリップ

2010年11月1日15時10分発行